

家族支援から本人支援への接続

ひきこもり支援 NPO のフィールドワークから

From Family Support to Youth Support: A Field Study of the Support Group for People with 'Hikikomori'

川北 稔

KAWAKITA Minoru

愛知教育大学大学院教育実践研究科

(Graduate School of Education Practice, Aichi University of Education)

Key words: 家族支援、NPO、ひきこもり

目的

本人へのアプローチが困難な状況で、家族の支援から始まった支援は、どのように本人の支援へと結びつくのか。家族・本人それぞれを支援する活動を営むひきこもり支援 NPO でのフィールドワークから明らかにする。

方法

東海地方に位置する民間支援機関での支援活動の成果について、質問紙調査とインタビューを行う。特に家族会活動に注目し、親による会への参加とひきこもりの改善との関係を考察する。

NPO 法人「とまとの会」(仮名)は、2000 年代初頭に設立され、ひきこもりの若者への家庭訪問や居場所の運営に続いて、作業所や就労支援事業へと活動を展開してきた。会の支援の特徴のひとつは、両親の積極的な参加を勧めるところにある。家族会は週 3 回という開催頻度で開かれ(調査実施当時)ひきこもり本人が居場所や就労支援に参加してから、家族が会に参加し続けることが望まれている。

会の参加者を対象として、家族会への参加が、どのようにひきこもりの改善に結びつくのかを問う質問紙調査を行った(2004 年 11 月)。

結果

会員となっている 104 家族のうち、81 家族が回答した。

(1) 本人の状況 ひきこもり本人の年齢は平均で 27.9 歳(男性 28.4 歳、女性 25.5 歳)引きこもり歴の平均は 8.1 年(男性 7.9 年、女性 9.2 年)。現在の活動状況は、正社員が 1.2%、アルバイトが 4.9%、就労体験中が 16.0%、通学中が 1.2%、ボランティアが 4.9%、友人との遊びや会話の機会を持っているのが 12.5%、外出を自由に行っているのが 43.2%、その他の活動は 33.3%。

(2) 家族の活動状況 親から見て「引きこもりは改善していると思うかどうか」どうかについて、「そう思う」(30.9%)、「ややそう思う」(33.3%)、「あまりそう思わない」(16.0%)、「そう思わない」(7.4%)、「すでに改善

済み」(1.2%)、「よくわからない」(11.1%)と回答された。

実際の参加者による参加頻度は、「週数回」(3.7%)、「週 1 回程度」(18.5%)、「月数回」(19.8%)、「月 1 回程度」(24.7%)、「数ヶ月 1 回程度」(23.5%)となった。

会の活動への定期的参加の状況は、「親のみ参加」(42.0%)、「親本人双方の参加」(33.3%)、「本人のみ参加」(9.9%)、「双方参加なし」(14.8%)であった。

(3) ひきこもりの改善に結びつく要因

親から見た「ひきこもりの改善」に結びつく要因を考える。原因変数として、「親の定期的な参加」「本人の定期的な参加」「親の参加頻度の高さ」「本人が現在抱えている問題」(精神的な問題や家族への暴力など)の有無について検討した。

結果、「親の参加頻度が高いこと」「本人が会に参加していること」が、ある程度独立した要因として、改善の実感に影響していることが明らかになった。

考察

家族の支援を、「改善の実感」に結びつけることは、NPO 運営上も重要であるといえる。報告では、家族会への頻度高い参加、本人が会へ参加することが、親自身の「改善の実感」につながっていることが明らかにされた。については、家庭を中心とした「改善」の実質は何なのか問われる。また、どのように本人の変化が生じた後で、家族の参加の動機付けをどう高めるか、今後の考察課題である。

参考文献

川北稔, 2006, 「家族会への参加と引きこもりの改善

民間支援機関における質問紙調査から『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 9 号。

川北稔, 2008, 「『ひきこもり』と家族 子どもの『受容』と『自立』のはざままで」荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎編『「ひきこもり」への社会的アプローチ』ミネルヴァ書房。